

地方における高卒就職のエスノグラフィー

尾川満宏(広島大学大学院)

1. 問題の所在

1990年代以降、若者の「学校から職業への移行」に関する研究は、高卒無業者の析出・増加メカニズムをはじめ、若者の職業意識や労働市場の変容などに関心を寄せてきた。近年では、都市部のフリーターや不安定就労者の移行・生活経験に関する質的記述も蓄積され、困難に直面する若者の経験や彼らをめぐる社会状況に注目が集まっている。

その一方、地方において、高校卒業後すぐに就職してゆく者の移行経験はあまり注目されてこなかった。高卒無業者層が拡大する一方、しかし就職は今日でもなお地方を中心に高校生の重要な進路のひとつである。にもかかわらず、地方高卒就職者たちの経験は十分考慮されることなく、高卒フリーター、あるいは高卒無業という都市部に顕著な問題が若者一般の問題として語られてきた。

以上の状況のもと進められる学校の指導枠組みの転換＝キャリア教育は、若者の目的意識や主体性を重視する一方、地域的な学校―職業間の接続構造への考慮を欠いている。若者たちの「夢」を煽ったとしても、地方ではそれを実現させうる雇用が不足しており、キャリア教育の孕む問題が顕在化しやすい。しかし、そうした状況での若者たちの移行経験は明らかにされてこなかった。

以上より本報告は、地方の若者の語りから彼らのキャリア選択過程を描き、その経験を解釈することで、これまで光を当てられてこなかった若者による移行の一側面を明らかにする。

2. 本報告の枠組み

(1) 先行研究の検討

先行研究には、若者のキャリア選択についての問題を若者の職業意識の問題とみなす議論と、労働市場その他の社会構造の問題とみなす議論がある。前者は若者個人の「キャリア発達」を重要視し、「望ましい」職業観・勤労観の育成などの必要性を主張してきた(文部科学省 2004)。

一方で後者は、若年雇用政策の重要性を指摘しつつ、厳しい労働市場のもとでは個々人に職業的知識・スキルが必要という。そうした立場からは、

広く「若者にとっての具体的な武器」を与えるため、学校の教育内容の「職業的意義」を高める必要が主張されてきた(本田 2005)。

これらの議論の多くは、若者を学校の指導の枠内にとどめることを前提に、個人のキャリア形成を「望ましい」ものにしていくための教育の方向性を論じてきた。と同時に、学校の指導から離脱しフリーターや無業を選択してゆく若者を、各者が想定する「望ましい」キャリア形成の基準に照らして否定的に表象してきた。つまり、学校の指導からの離脱＝「望ましい」キャリア形成からの脱落、という枠組みを構築してきたのである。

報告者は、こうした特定の若者層の経験から導かれる問題の認識枠組みを相対化する必要があると考える。したがって、これまで等閑視されてきた地方高卒就職者の移行経験を検討することで、この課題に答えていく。

(2) 〈洞察〉の概念

学校の指導から逸脱してゆく若者たちの進路形成について、ウィリス(訳書 1996)はイギリス労働者階級少年の経験を描いている。学校や教師に反抗する少年たちは、学校や教師への「順応と服従」が自分たちの信じる将来に何ら役立ちそうもないこと、労働の内容はどれをとっても同質であるのに、それを選び職務を生きがいとすることの無意味さ、一部の者だけが成功する条件を、全員が従うべきものとする公教育制度の矛盾、を見抜いていた。これらの少年たちの認識をウィリスは〈洞察〉とよび、肉体労働の世界に将来を展望する彼らの「イデオロギーに対する能動的な改竄者」としての主体性を強調した。本報告は、ウィリスが提示した洞察の概念に注目する。

3. 調査の概要

報告者は、過疎化の進むある地域で高卒就職者のキャリアと生活世界に関する質的調査を行っている。調査協力者は、この地域の県立A高校総合学科を卒業し、各々地元中小企業に就職した20代男性数名である。彼らは調査の開始以前から報告者と交流があり、調査協力を依頼し承諾を得た。

総合学科は、キャリア教育の理念をもっとも体現するシステムのひとつである。調査協力者たちは、高校側から多様な専門科目を選択可能なものとして用意され、個々の進路希望や適性、興味にもとづく選択と学習を通した主体的なキャリア選択を求められていた。一方で、調査地域の労働市場は、限定的な選択肢のなかでキャリアの選択を彼らに迫る。つまり、様々の可能性から主体的に選択させようとする教育の意図と、限られた選択肢しか用意できない地方の労働市場の現実の間には、構造的な齟齬が存在するのである。

4. 調査結果と分析

こうした状況において、調査協力者たちは高校時代にどのようにキャリアを選択していったのか。以下では、調査の一環で行われた個人インタビューにもとづき、彼らの経験を描いていく。

A 高校では、1年次末には2年次以降専門的に学習する分野としての「系列」を選択し、そこでの学習・資格取得を通して進学や就職に向け活動するよう、カリキュラムにおいて定められていた。

しかし、調査協力者の進路意識や就職意識は、みな口をそろえて「それまでは考えてなかった」と語ったように、高校3年次まで萌芽をみることはなかった。職業選択を視野に入れた学習が求められる総合学科において、彼らはそうした学校からの要請やキャリア教育に必ずしも従わないかたちで進路選択に臨んでいたのである。調査協力者の一人は、就職は「どこでもよかった」と語った。

協力者(K): つーかね、第一希望がなかったもん!

報告者(*): あそう。

K: そう言われてみても。別に〇〇〇(大手自動車メーカー)に行こうとかも思わなかったし、[*: うん。]地元におるつもりでおったけ、はなから。

協力者(Y): その頃どこに就職しようとかも全然なかった。で、とりあえず漠然と「まあ就職でいいか」みたいな。

このように職業的興味・関心や進路意識が不明確な状態は、現代の高校生に少なからずみられることだろう。しかし、意識が不明確であったり進路希望の変更回数が多ければ、進路選択の段階で困難を抱えやすいというデータがある(日本労働研究機構 2003)。本報告の調査協力者からも困難

や戸惑いに直面した経験が語られた。

*: こだわりとかなかった? 測量の授業受けとったけど、それを活かしてとか。

K: 考えた、考えとったけど、[*: うん。](就職先は)まずなかったね。まず免許、免許一つか、資格持っていないと話んならん世界だけえ。

このように「測量」関係への就職が難しいと知った K は、しかし一転、「そりゃあ一番の興味はクルマでしょ」という理由で、就職できる企業を「早く」「簡単に」決め、自動車学校に通い始めた。このとき、総合学科の科目選択制度は、彼がキャリアを選択する際の準拠とはなっていなかった。一方で、学校に寄せられた求人には特定の業種や職種のものも多く、それらに「興味がなかった」ため戸惑いを抱いたという者もいた。

Y: 無いつつても、自分が何をしたいから探しとるわけでもなかったんだけどー。(中略)その頃まあ、若干だけど「どうしようかな」みたいなのはあったね。

しかし、後に Y は「担任の先生」に「パン工場」を紹介され、「嫌でもなく、良くもないけど」「『まーいいかな?』みたいなノリで」受験した。彼は、学校に寄せられた求人には魅力的なものもなく悩んだが、担任の先生に「勧められたってのもあるし」「別にこのまま待つとつても他に、いいもんもないかなみたいな」考えに至り、逆に早い段階で就職先を決めることができたという。

こうした彼ら個別のキャリア選択は、いかに可能だったのか。彼らの経験をふまえたとき、学校の指導やキャリア教育からの離脱はどのように解釈されるのか。報告では、これらの課題についてウィリス(訳書 1996)が提示した〈洞察〉の概念を用いながら議論する。報告の枠組みや参考文献などの詳細は、当日の配布資料を参照されたい。

〈引用参考文献〉

- 本田由紀, 2005, 『若者と仕事』東京大学出版会。
 文部科学省, 2004, 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」。
 日本労働研究機構, 2003, 『学校から職場へ』調査報告書 No.154。
 ウィリス著, 熊沢誠・山田潤訳, 1996, 『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房。